
ハイスクールD×D ふりょうなりアスさん

ジェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D ふりょうなリアスさん

【Nコード】

N2222V

【作者名】

ジェイ

【あらすじ】

ヤンキーなリアスが繰り広げる新たな物語。

「ん？新たな物語い？

はあ、だりいなあ……」

始まり始まり。

プロローグ（前書き）

この小説はリアス主人公の性格改編ものです。

もういつこの作品の執筆が進まないときなどに更新させていただきます。

プロローグ

よお、とりあえずはじめましてだな！

俺の名前はリアス。リアス・グレモリー、悪魔だ。

こんな喋り方だが女だぞ？

まあ名前でわかるか。

それに男喋りだからって心は「男だああ！」とか女が好きとかではない。

ふつーに男のが好きだかな？

別に昔からこんな喋り方では無かったんだけどなあ。

俺の実家は悪魔の公爵の家でかなりの金持ちだ。

それにより俺も高度な教育を受けていた。

その時はまだ私と言ってたし言葉ももつと丁寧だった。

そんな私を俺に変えちまったきっかけは七歳の時のことだ。

俺のお兄様が持ってきたお土産だ。

内容は日本の漫画だったりする。

前から日本に興味があって毎日勉強と習い事の俺に娯楽の意味を込めて大量に買ってきてくれたわけだ。

何故かヤンキーものばかりな……………

確か俺は「お兄様には申し訳ありませんがこんな野蛮なものの読めませんわ!」とか言ってたっけか。

んでお兄様が「リアス?読む前に決めつけてはいけないよ?

確かにこの本の人物達は不良と呼ばれているが彼らは仲間を大事するし時には命すら賭けれる。

何よりこれは娯楽さ。

本気にしないで読んでみなさい。

結構面白いよ?」

お兄様いわくこの時ほど自分の発言を後悔したことはないらしいぜ?

つまりな、俺ははまっちまったんだよ。

そして気がついたらこんな風になっちまった訳だ。

当然お父様やお母様、お兄様は俺を元に戻そうとしたぜ?

でもな?当時の俺はヤンキー漫画にはまってたから当然の様に反発してた。

なんつーの?反抗期ってやつ?

最終的には力ずくで治そうとしたがこれも反発してた。

うぜー、だりい、ざけんな！が口癖になるぐらいだったからな。

毎度のごとく教育指導という名の折檻を受けていた訳だが、ここに来てグレモリーの血がでてきた。

グレモリーは天才の血筋で俺にはお母様の大王バアル家の血も流れるハイブリッドだったりする。

つまりわな、俺強くなっちゃった（笑）

見て覚えた、食らって覚えた、戦って覚えた。

俺の脳みそすげーぞ？

大概すぐ覚えちまうからなあ。

身体も女なのに無駄にスペックたけえしな。

んで埒があかないつつう訳でお互いに妥協しようぜってことになった。

俺は喋り方以外は基本的に言うことを聞くで両親は公式な場以外は認めようとなったわけだ。

そして今だか俺は日本の駒王学園の三年でオカルト研究部、部長を

している。

だりいけど一応俺にも眷属いるし周り是一般人だから隠れ蓑が欲しかったんだよ。

そしてさらに現在進行形の俺だが

「だりい……………」

ソファに寝転がっている。

「……………部長、下着が見えてはしたないですよ？」

朱乃に注意をうけた。

「うるせえよ。

別にパンツくらい良いだろうがよお。

俺はもともとは裸族なんだよ！

テメーらが何も言わなきゃ今頃全裸だこのやろー。」

おいおい、ため息はくなよ！

ちよい傷つくだろ！？

「……………祐斗君に見られても平気なんですの？」

「はあ？祐斗に見られたからってなんだよ？
家族に恥ずかしがってどうすんだ？

それに見られて恥ずかしい体してねえしよ。

なんなら今からパンツ一丁で町歩いてやるっか？」

自分の胸を「ほれほれ」と持ち上げながら言ってみた。
勿論冗談だぞ？

もしかして期待しちゃった？しちゃったのか？

あはははははは！

ばっかじゃねーの！？

まあ実際見られても気にしないし全然できるけどな、マッポにしよ
つぴかれても面倒だからやんねーけど。

しかし朱乃は冗談とは思わなかったらしい。

「や、やめて下さい！

リアスはもつと自分の容姿を自覚して！

襲われるわよ！？」

うわぁ、信用ねえな……………

「いや、冗談だからな？

マッポとかだりいからやんねーよ。

それに襲われる？返り討ちだぜ♪

そして朱乃、口調くずれてるぜ？」

「はぁぁぁぁぁ。

全く部長は……………」

おいおい！ため息長くな？

流石に傷つくわ……………ん？

「…………おい朱乃…………」

「はい、どうやら部長を直接召喚されるほど強い願いみたいですね。」

俺を呼び出すか…………

ひっさびさだぜえ♪

「じゃあ朱乃お、行ってくるわ」

「はい、お氣をつけて。」

誰に言っただよと応え俺は魔法陣で転移した。

*

俺が召喚されるとそこは公園だった。

ただ異変が一つ。

1人男が腹に穴をあけて死にかけていた

「こいつ墮天使にやられたか？

っーかうわぁ……

うちの生徒かよ。

メンドクセー！

ん？でも何で死にかけてんだ？

こいつ一般人だよな？

ソーナの所で見たことねーし。」

「……が頭を埋めつくす。

ってヤバイヤバイ！

こいつ死にかけてんだった！

どうすっかなあ……

「ん……よしっ！

どうせ死にかけてんだし俺の眷属にしちまうか！

んじゃ準備準備……っ」と

何個駒が必要か調べてみた。

特別な力を持っていたとしてもせいぜい兵士2、3個くらいだろ？

「さーて、結果はどうでーすかぁ」

お？………おいおいおいおいおいおいっ！

マジかよ……………」

いくら兵士でも八個も必要かよ……………」

ニヤリッ

「決めた！」

今日からこいつは俺のだっ！

おいお前！俺が向かえに行くまで死ぬんじゃないぞ？

絶対だ、わかったな？」

俺は駒を使いながら魂に刻む様に術を使いながら語りかけた。

さてさて、面白いことになりそうだぜ♪

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？

こっちは微エロのギャグと戦闘メインで考えてます。

原作とは事件などは同様にして内容を変えようと考えています。

良かったら感想下さい。

でわでわ

下僕ゲットじゃね？（前書き）

もう一個がちょっと詰まっているのでこっちを更新。

下僕ゲットじゃね？

あの男を助けてからちよい時間がたった。

まあ助けたっつーより強制下僕な訳なんだけどな！

あいつが何すんのかたまに観察してんだが自分の変化に戸惑ってるみてーだ。

夜に走りだしたり色々やってるようだが事情を知らねえ奴に見られたら変態だ、変態。

学校でも力を抑えて授業を受けてたみたいだしな。

つーか俺は今登校中な訳だが

「姉御！おはよござーます！」や

「姉御ー！今日も綺麗よー」や

「姉御ー、助けてくだせー」など聞こえてくる。

だりい……………

だりいけどシカトする訳にはいかねえよな……………はあ

「おう、はよーさん。

つーか俺が綺麗なのはたりめーだろ！

後テメーは助けばかり求めねえで自分で解決しろや！
んでどーしたんだよ？」

律義に答えてるおれがいんだよなあ。

はあ、だりい。

つーか何で俺が姉御なわけ？

朱乃は駒王学園のお姉さまだったけ？

んで俺が駒王学園の姉御または首領^{ドン}ねえ。

あながち間違っちゃいねえがなんかなあ。

はあ、だりい。

全員からの挨拶に適当に応えてから俺はふと上を見上げると俺の新下僕君と目があつた。

ふーん、俺のこと見てやがんな。

とりあえず意味深に笑ってやるか？

ニコリ

おーおー！顔赤くしちゃってえ。

あいつ可愛いなあ！

なんていじめがいがありそうなんだあ！

これから楽しみだぜ！

余談だが俺が笑ったことによって何人が鼻血をだしたり気絶する奴
がいたらしい。

何でか朱乃に聞いてみると

「部長は普段ダルそうな顔が無邪気な笑い方をしますから。

聞いた話だととても綺麗だったそうですよ？」

が理由らしい

意味わかんねえ。

*

さらに数日経過して俺は

「……………ちょー暇だ。」

暇してる。

だりいのは嫌だが暇なのはもっと嫌いなんだよ！！！！

ちなみに今は夜で悪魔稼業中だ。

だけど

「誰も召喚されねえなあ……………」

そう仕事がこねえ！

俺だけじゃねえぞ？
皆だ。

「なんか面白いことねえかなあ

ん？」

この感じは……………

ちっ！また墮天使か！

「おい、朱乃お！

俺は今から新下僕を向かえに行つてくつから後のことは任せんぞ！」

「かしこまりましたわ。

一応墮天使の動きも調査しますか？」

「頼むわ！」

祐斗に小猫はこの後に仕事はいつかもしんねえから待機してる！」

「了解」

んじゃあ行つてくつかねえ！

俺は駆け出した。

*

俺が現場につくと新下僕と堕天使がいた。

「つかあいつまた腹に穴をあけてやがる！」

「たくよお、治すの俺しかいねえじゃん。だりい……」

だがまずいなあ！

「おいクソ堕天使！そのへんにしときな！」

「そいつは俺の下僕なんだよ！」

急に現れた俺に驚きつつも堕天使は言う。

「これはこれは失礼した。」

私は堕天使ドーナシーク。

そこの下級悪魔をはぐれと思ったものでね。

しかし貴女の眷属ならしつかり手綱を握っていたほうが良いのでわ？

またいつ私の様な者が現れるかわからんぞ？」

「うるせえぞ？」

ここはおれの管理区だ、俺が下僕の管理をどうすつかは俺の勝手だ！

まあ今回は見逃してやるけどな……………
次はねえぞ？」

俺は殺気を込めと言い放った。

「ふ、ふむ。理解した。

だ、だが我々の邪魔をしないで貰おうか。
も、もし邪魔するならばか、かく覚悟をしても、もらっぞ？で、
は失礼する！」

堕天使はそう言って逃げる様に去って行った。

はっ！ありゃあ雑魚だな。

っと、今はそれどころじゃねえな。

はあ、だりい。

とりあえずこいつの家に行くか。

「しよっと」

俺は新下僕を肩に担いで歩きだした。

それにしても堕天使どもは何たくらんでやがんだ？

内用次第じゃカチコミでもすつか？

そんな事を考えながら俺は夜の町を歩いて行くのだった。

*

翌朝目が覚めると馬鹿がいた。

頭を抱えていたり悶えていたり動き回ったりと忙しい奴だ……

俺は頭をかきながら

「……おい、うつせし行動がうぜえからちよいと落ち着けや」

馬鹿に声を掛けると今までの奇行がピタリととまりこちらを見ないまま聞いてきた。

「……見ました？」

「何をだ？」

「……俺がしてたことです。」

「ばっちし！」

俺はサムズアップをして応えた。つーか見てねえよこいつ！俺が応えるとこいつは

「おおおおお おおおお おおおお！……！……！」

今度は奇声をあげて悶えだした。

見られたのが恥ずかしいが起き抜けにこれはキツイ。なので

「うるせえぞ！」

テーマの馬鹿な行動の結果で更に馬鹿なことしてんじゃねえよ。

「つか人と話すときはこっち向けや！」

「またもやピタリととまり……はい、すみません」と言いながら振り向き

「ぶはあああ！」

鼻血を吹き出した。

「おいおいおいおい！」

何で鼻血だしてんだ！？」

俺がちよい驚いて聞くと。

「ぜ、ぜん、ばい。お、お、っばい、が」

鼻を押さえながら話しているせいか聞き取りにきーな。

ん？あいつガン見してやがんなあ。乳を。ちなみに俺は全裸だ。寝るときに服着るのはだりいべ？

そして俺は気がついた。

「はは、ん」「ニヤリ

こいつ結構初なんだな。

じゃあこんなのはどうだ？

俺は自分の乳を持ち上げながら

「このことかあ？」自分でも分かるくらいニヤニヤしながら言った。

「ぶべええええ！」

ははは！こいつまた鼻血吹き出した！

マジおもしれえな！

っーかそれよりも

「そーいやまだ自己紹介してねえな。
知ってつかもしんねえが俺はリアス・グレモリー。
駒王学園三年だ。」

「し、知ってます。」

俺は兵藤一誠、皆からイツセーって呼ばれてます。」

そうか、イツセーな。

「つーか何で先輩が俺んちにいるんですか？
後ぶっ！な、なんで裸？」

こいつまた鼻血出してやがる。
もつと遊んでたいが余り時間がねえか。とりあえず簡単に説明して
やっかな。

「テメーは昨日殺されかけたの覚えてつか？」

イツセーははつとしてから

「……………はい」
と応えた。

「それがわかれば十分だな。
お前が殺されかけた後俺が助けてお前ん家に連れてって治して寝た。
いじょー、説明しゅーりょー！」

ちよー簡単な説明だがわかったか？

「え」と助けてくれたのはわかりました。ありがとぅぶっ！……
ごさいまづ。

た、ただなんで裸なんですか！？

っ！か先輩何者なんです！？」

人の乳ガン見してて良く言うなあ。

正体も簡単に説明すつか。

「とりあえず俺の正体な。

実は俺悪魔なんだわ。

んでイッサーを襲ったのは墮天使な、簡単に言えば俺らの敵だ。
俺らについては以上！

後はなんで裸かだがな、ようは治りが良いからだな。

っ！かオメーよお、俺の乳ガン見しといて文句つけんなや！

むしろ役得だろーが！

それともあれか？テメーは乳嫌いか？ほれほれ」

乳をゆっさゆっさ揺らしながら言つと。

「大好きです！」ダラダラ

鼻血をたらしながらサムズアップで応えた。

「っ！か先輩が悪魔ってマジすか？」

「おう、マジマジ！

っ！かテメーも悪魔になったから。ついでに俺の下僕だから。詳しいことはさっきも言ったが放課後に話てやつから今は聞くなよ？」

下僕ゲットじゃね？（後書き）

あんまりすすんでませんね。
まあ気長にお願いします。

学校に行こうぜ！（前書き）

ちよおおおおおおお久しぶりの更新です。

もっと早くするつもりでしたが思ってた以上に長くなりました。

でわでわ楽しんで頂けたら幸いです。

学校に行こうぜ！

あの後部屋にイッセーのお母様が来て錯乱してた。

俺みたいな美人と自分の息子が裸で一緒にいたんだからしょうがねえか（笑）

まあその後俺の話術と魔術で丸め込んでいろいろ認めさせてやったがな。

つかイッセーのお母様は料理うめえな！お袋の味って感じで俺的にはスゲー良かったわ！

どうしよ、イッセーの家に入り浸ろうかなあ？

幸いイッセーの両親は俺に対して悪い感情は持ってないらしいし。

まあまだイッセーにいろいろと説明しなくちゃいけねえから今後要検討だな。

つか俺は今イッセーと二人で登校中なわけだが………

「……うぜえ。」

思わず悪態をついちまうくらい周りがうぜえ。

周りの連中は口々に

「姉御〜！何で俺は駄目だったのにその野獣はOKなんすかぁ〜！？」

「姉御逃げて！そんな野獣と一緒にいたら姉御が汚されるわ！」

「むしろその野獣をやっつけて！」

「野獣死ね！」

見事にアンチイッセーが出来上がっていた。

つーかイッセーが野獣？

珍獣の間違いじゃねーのか？

イッセーにいたっては涙目だ。

こいつは今まで何してきたんだ？試しに本人に聞いてみる。

「なあイッセー？」

てめえは何でここまで言われてんだ？」

イッセーは言いにくそうにしながらも

「え〜と、俺がエロいからです。」

この近隣ではエロ〃俺って言われるくらい有名みたいですから……
…。」

何処か諦めたような哀愁を漂わせて言った。

「何だ？ イッセーはエロく見られんのが嫌なのか？

別に俺等くらいの歳ならエロくてもおかしくねえだろおよ。」

俺は思ったことをそのまま口にした。
するとイッセーは顔を輝かせ

「お、おおおおおおお！

ま、まさか女性で俺を肯定してくれる人がいるとは！

俺って自他共に認めるエロだから女のコにはいつも嫌われてて……

……。

だからそう思われてるって思うと少し憂鬱になってたんです……

…。

でも！でも姉御は違った！姉御はちゃんと分かってくれた！

これは奇跡だ！姉御との出会いは俺にとって奇跡なんだああああ
あああ！

あゝ、ありがたやありがたや……」

ぐ、恥ずかしい奴だな／＼／

こんなことぐらいで拜んでんじゃねえよ！

きつと俺の顔はスゲー真っ赤だろうな。

だああああ！周りの連中が見てやがるじゃねえかよ！

くっそ！さつさとトンスラこくか……。

「あの、姉御？お顔が赤いっすけどどうかしたんですか？」

イッセーの野郎おおおお！

誰のせいでこんな風になってると思ってんだよ！

「……………／／／」

俺は無言でイッセーを睨めつけた。

「うつ！／／／」

おいおい！何でそこでめえが赤くなってんだよ！？

あーもう訳わかんねええええええ！

S i d e o u t

イッセー S i d e

何か姉御の顔が赤くなったからそれを指摘したら

「……………／／／」

姉御に睨まれた？んだけど

「うつ！／／／」

何これ、めっちゃ可愛いんですけど！

普段のカッコイイ姉御とは違う可愛い姉御……………。

ちょおおおおおおお良いです！

ヤバイなあ、俺失恋したばかりなんだけどこりや惚れたわ。

ずっと姉御といれたら幸せ何だろうな。

俺、悪魔になって姉御の下僕になったみたいけどどうなるんだろ？

姉御と一緒にいれるならそれも良いかな。

「——い——イッ——聞いてん——い！」

ん？姉御の声？

やべっ！考えにふけてた！

「すすすみません！ちょっと考えごとしました！」

素直に謝ると姉御はため息を吐きそして言った。

「たく、ちゃんと話を聞けってんだよ。」

今日のでめえん所に使い出すからそいつについてこい。
ちゃんと説明してやつからよ。」

俺はこれに「わかりました」と応え学校に向かって姉御と歩きだした。

*

俺は今旧校舎まで来ていた。

姉御の使いつて奴が迎えに来ただけどそいつは学年1のイケメンの木場だった。

最初、こいつが来たときは何しに来たんだよ！イケメン死ね！とか思い面白くない気分だったけど木場が俺に向かって来て「リアス・グレモリーの使い」と言う言葉で理解し、コイツについて行った訳だ。

……っか周りの女どもがマジっぜえ……。

木場が来たときはキヤーキヤー言ってた癖に俺と歩き出すと今度はキヤーがギヤーに変わりやがった！

拳句には俺と木場のカップリングまでしやがって！

何が兵藤×木場だよ！

気持ち悪いこと言ってるじゃねえぞ！

俺のこと野獣扱いしてる癖にお前らだって大概に腐女子じゃねえかよ！

松田じゃないけどお前ら脳内で犯すぞ！

いや、それは駄目だ。俺は強姦は望んじやいない。

やっぱり目指すは正統派ハーレム！

あっちからおっぱいをさらけ出すくらいじゃないとつまないだろ？

ははははは！妄想だけど楽しいな！

……………はあ、妄想楽しいけど同じくらい悲しくなってきた。

あゝあ、モテたい……………。

何で俺はモテない？

やっぱりイケメンか？イケメンが良いのか？

うわあああああああああ！イケメン何か大っ嫌いだあああ
ああ！！

「兵藤君、ついたよ」

俺が真剣に下らないことを考えていると木場から声がかかった。

本当はイケメン何かと話したくないけど

「ん、サンキューな」と礼を言った。

まあいくらイケメンが嫌いと言っても案内してくれたしな。

何かしてもらったら礼をするのは当然だろ？

木場は俺の礼に「どういたしまして」と微笑み「失礼します」と言いながら部屋に入っていた。

俺も木場に続く様に「失礼しまーす」と言いながら部屋に入った。

部屋に入ると何故か木場が顔を赤らめ目を手で覆いそっぽを向いている。

何事だ？と思いながら部屋の中を覗いた次の瞬間

「ぶはあああつー!!」

俺は盛大に鼻血を吹いた！

イツセイ side out

俺は部室で祐斗がイツセーを連れて来るのを待っていた。

ソファーに寝転びながら待っていると「失礼します」「失礼します」と声が聞こえ、祐斗とイツセーが入って来た。

む？祐斗、何で顔を赤らめ目を手で覆いそっぽを向くんだ？

続いてイツセーが中を覗く様に見て俺と目があつた次の瞬間

「ぶはあああつ！！」

ちょ！？何でいきなり鼻血を吹くんだ！？

俺が何事？と体を起こすと

「ぶべらっ！」

イツセーがまた鼻血を吹いた！

え？え？何なんだ？俺何かしたか？

つかイツセーが鼻血を出しながら血走った様な目で俺をガン見してやる。

……… ちょっと怖いと思ったのは内緒だ。

そして後ろから声が聞こえた。

「部長、先ずはお召し物を。」

朱乃の声だ。

後ろをみると俺の服を持ってジト目で俺を見る朱乃と、少々顔を赤らめた子猫が飲み物を持って立っていた。

朱乃の視線はまだ服を着てなかったのかと言っている……リアス、まだ服を着てなかったの？」実際に言いやがった……。

「……か服？何のことだ？」

俺はさっきまでの行動を思い返してみる。

祐斗がイッセーを連れて来るまで暇だったし、昨日は風呂に入れなくて若干気持ち悪かったからシャワーを浴びていた。

それから体を拭いて………あれ？服を着た記憶がない。つか下着を着けた記憶すらない。

つまり俺は今全裸だ。

「あ~~~~、服着るの忘れてた。」

俺の素直な一言に

「「「忘れてたんかいっ!!」「」」」

全員からツツコミが入った!!

………何だよ、しょうがねえじゃん!忘れてたんだからよあ。

っ!か祐斗はいつまでそっぽを向いてんだよ。

俺は祐斗に近づき

「えいや!」

抱きしめた。

しかも頭を抱くような感じで!

祐斗の頭は俺のおっぱいに挟まれ「むーーーー!むぐっ!むぐぐぐぐ!むーーーー!////」と喚いている。

そっかそっか、俺のおっぱいはそんなに良いか。

よし、ついでに頭を撫でてやろう!

むぐむぐ言っている祐斗の頭を撫でつつ、近くにいたイツセーを見ると

「じいじい」

何かめっちゃ見てる！つーか口でじいじいじいとか言っなよ！

スゲー羨ましそうな顔してるしよ。

「何だよ？イツセーもして欲しいの」「して欲しいっす……」
…速攻だな」

「だって姉御のおっぱいっすよ！

姉御に抱きつかれるだけでも幸せなのにおっぱいに挟まれるなんて
……ああ、死んでも良い……。」

ふふふ、そーか死んでも良いか！

そんなに褒めんなよ、照れるじゃねえか。

「OKOK！おめえにもしてや」「ガンッ……」
「……」

あまりの痛さに祐斗を手離し頭を抱えてしゃがみこんだ。

後ろを見ると朱乃が笑顔で立っていた。

俺は涙目になりながら

「あ、朱乃おおお、何すんだよ！いてえだろ！」

と文句を言うが。

「服を着て下さいね」ニコニコ

「いや、だからって殴らなくて「服を着てくださいね」……..
あの、朱乃？」

「服を着てくださいね♪」 ニコニコ

.....

.....

.....

「服を着てくださいね♪」 ニコニコ

「はい、服を着ます。」

俺は服を着始めた。

こええええええ！朱乃めつちやこええええええええええ！

顔は笑ってるけど目がこえええええええ！

くそおおお、悪ふざけし過ぎた……。

俺はいそいそと服を着たのだった。

イツセーの残念そうな、絶望したような顔は忘れそうにないな。

*

着替えた俺はイツセーに悪魔の事を説明した。

悪魔の歴史、天使や堕天使について。

そして『悪魔の駒』について。

全てを聞き終えたイツセーは燃えていた。

エロ方面に、だけどな。

「ハーレム王に俺はなる！」らしい。

まあ良いけどな。

つーかエロで強くなるならいくらでもエロいこととしてやるぜ？
面白そうだしな！

ん？つーか何か忘れてるような……………おお！

イツセーの神器を忘れてた！

コイツは駒を八個も使ったんだしとりあえず神器を呼び出せる様にしときてえしな。

「おいイツセー！」

俺の言葉にイツセーは「何すか？」と返事を返す。

「おめえの神器を調べるからよ。とりあえず目を閉じろ」

「????、神器って何すか？」

あゝ、そういえばコイツは神器を知らねえのか。
仕方ねえな、説明してやっか。

「神器ってのは特定の人間に宿る規格外の力だ。歴史上に残る奴等は大概この力を持ってたな。」

ちなみに多分だがイツセーが堕天使の天野夕麻、レイナーレに殺された理由はこれだな。」

俺の簡単な説明にイツセーは驚く。

「ど、どういことですか!？」

俺が殺されたのは神器が俺に宿っているからってだけなんですか!？」

「つかそれだったら俺と付き合う理由はないでしょ!

殺すだけなら直ぐに殺せば良いのに。

「つか俺生きてるっすよ!」

さっきまでとは違い真剣な表情で問いかけてきた。

ま、そりやそうだよな。自分に神器があって彼女がその自分を殺すためにやって来たなんて聞かされればそうなるわな。

「落ち着けイツセー。

それだけおめえの神器は危険視されたってことなんだよ。

殺されない奴も腐るほどいるっつか殺されない奴のほうが多いからな。

彼女のふりをしてたんだってイツセーからの神器の反応が曖昧だったからだろうな。だからじっくりと調査する為におめえに近づいて調べたんだろ。」

「そ、そんな……」

俺はそんな理由で……………。

じゃあ俺が今生きてるのは？

お、俺、殺されたんですよね？」

「それは『悪魔の駒』の力だ。

転生、人間にはこの力が行使される。

まあ悪魔として死ぬとそのまま消滅すつか気をつけろよ？

ともかく目を閉じろ。そしてお前の思う一番強いモノを想像しろ。」

若干納得できてないようだがこれは仕方ねえ。
流石の俺にもどうしようないことだ。

そしてイツセーは

「一番強いモノ？

えーと、ドラグソ・ボールの空孫悟ですかね？」

「ドラゴン波!!」

やったああああ!!

マジでやりやがった!!

ぷ、ぷぷぷぷ! あゝははははは!

や、やべえええ、し、死ぬううう。

下僕に殺されるううううう!!!

イッセーの周囲が光っているなか俺は笑い転げていた。

そして光が収まると手を前に突きだしたまんまで固まり左手に赤い籠手の様な物を装着したイッセーがいた訳だが。

「やべえ、俺マジでドラゴン波撃てたよ……………」

この一言は完全に俺のツボに入っただ。

「あははははははははははは! な、何がドラゴン波撃てたよ、だ! た、確かにそれっぽいけど、ぷ、あははははははは!」

俺は声に出して笑い転げた!

さっきまでは何とか声に出して無かったがもう無理！
我慢できねえ！

「そ、そんなに笑わないでくださいよ！
俺だって恥ずかしいんすから！」

「む、無理！想像しただけでヤバかったんだぞ！？それをやられた
ら……………はははははははははは！」

俺とイッセーの言い合いはしばらく続いたのだった。

*

「ううううううう」

「いや、わりーわりー。つい笑いすぎた。」

あの後何とか俺は落ち着いたが今度はイッセーが拗ねた。

たく仕方ねえ。

「ほらイツセー拗ねんな。後ではふぱふしてやっか「マジすか！うつす！了解つす！」……………復活はえーなおい。」

まあ良い、とりあえず説明の続きだ。

「おめえの左手に着いてるせれが神器だ。それが理由でおめえは殺されかけた訳だな。

んで瀕死の中おめえは俺をよんだ。この紙から俺を召喚してな。」

俺は一枚の紙を取り出した。その紙には『あなたの願いを叶えます！』と魔方陣が書かれたチラシだ。

「これは俺等が配っている奴だ。最近の人間はわざわざ魔方陣を書いてまで悪魔を召喚する奴がいねえからな。

だから悪魔を召喚しそうな人間に配ってたって訳だ。

んでこれをイツセーが持っていて死にかけたおめえは俺を呼んだ。普通なら眷属が呼ばれるんだが俺が呼ばれた、よほど願いが強かったんだろうな。」

あの時は流石にびびったわ（笑）

「召喚されてみれば死にかけたイツセーがいてどうせなら俺の下僕にしようってことでおめえを救ってやった。悪魔としてな」

次の瞬間俺は翼をひろげた。

蝙蝠のような悪魔の翼だ。

朱乃達も翼を広げている。

おめえらわかってるねえ！タイミングばっちしよ！

イツセーも体が自然に反応したのだろうが翼を広げていた。

まあとりあえず

「んじゃ、改めて自己紹介な。祐斗」

祐斗をまず指名すると笑顔をイツセーに向けながら

「僕は木場祐斗。兵藤一誠君と同じ二年生ってことはわかっているよね。えーと、僕も悪魔です。よろしく」

「……一年生。……搭城小猫です。よろしくお願いします。……悪魔です」

続くように小猫が挨拶し小さく頭を下げた。

「三年生、姫島朱乃ですわ。いちおう、研究部の副部長も兼任しております。

今後もしよろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

朱乃は礼儀ただしいなあ。

さて最後に俺か。

俺は胸をはりながら堂々と言った。

「んで俺がコイツらの主で悪魔のリアス・グレモリーだ。家の爵位は公爵。よろしくな、イツセー」

こうしてイツセーは正式に俺の眷属になった。

ふふふ、楽しくなりそうだなおい。

学校に行こうぜ！（後書き）

いや~~~~、このリアスさん書きやすい！

社会人になるまえの私がこんな感じだったので書いてて昔を思い出します。うふふふふふー

俺の拳はいてえぞ？（前書き）

久しぶりの投稿です。あまり話は進みません。

俺の拳はいてえぞ？

最近は面白いことばかりだ。

理由はやっぱりイッサーだな。

あいつは一々面白い。

悪魔の仕事では魔方阵から転移できねえし契約をとれねえくせにアンケートでは賛辞を貰うわ、今まで無いことばかりだぜ。

他にもシスターを教会まで案内したとか聞いた時は思わず

「……………ゴムはつけるよ？避妊は男の義務だかな？」

って言っちゃった。

イッサーは赤くなりながら否定してたけどそれくらい前代未聞だったわけよ。

あ、ちなみにイッサーの俺の呼び方は「部長」になったぞ。
姉御でも良かったけど一応、な。

んで現在何してっかと言うとだな

「ガガガッガガッガガガッ！」

「あらあら。まだ元気そうね？まだまだいけそうですわね」
カッ！

「ギヤアアアアアアア！」

絶賛リンチ中だ。

相手ははぐれ悪魔のバイザー。

俺のシマに勝手に入って来やがった馬鹿だ。

イツセーに駒の特性を教えながらついでにブツ殺だった訳だが予想以上に雑魚だわ。まあ朱乃の説明をすっかな。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意でよお、まあ内容は見てればわかるんlar？」

後あいつスゲースだからな。」

俺も良く殴られるがかなりいてえんだよな……………

「普段は優しいんだけどな、俺以外には。
一旦戦闘になると中々にエグいぞ？」

おおーい朱乃おー！俺の分も残しておけよー！」

「うふふふふ、嫌ですわー。部長はトドメだけで我慢してください。」

ちい、またかよ！最近バトってないから欲求不満なんだよ！

仕方ねえな、後で祐斗と小猫で遊ぶか、肉体言語で！

お？イッセーどうしたんだ？震えてやがる。

「……うう、朱乃さん。俺怖いッス」

ああ、あれ見て怯えてンのか。

「びびってんじゃねえよ。まあわからなくもねえけど……。朱乃は仲間には優しいからよ。俺以外には……。」

まあ大丈夫じゃね？てめえのこと可愛いとか言ってたし。」

「うふふふふふふ。まだまだいきますわよ！」

「うう、やっぱり怖いッス……………」

俺のフロローが台無しだ……………。

その後も数分間朱乃の攻撃は続いた。

朱乃が一息ついたのを確認してから地面に突っ伏すバイザーに近づく。

「最後になんかあつか？まあ聞くだけ聞いてやんよ。」

だりいけど一応な。

するとバイザーの奴

「貴様の命だああああああ！」

とかほざいて特攻して来やがった！

ははっ！まだまだ元気じゃねえか！

だったら！

「うらああああー！！」

どがんっ！！

「ぐばおおおお！！！」

相手してやんなきゃな！！

俺の拳ですっ飛ぶバイザー。

拳に魔力込めたから小猫のよりいてえぞ！

お？まだ立ちあがんのか？

へえ、雑魚のくせにタフだねえ。

ならまだまだ楽しめそうだな♪

「はっはーっ！ビートにのるぜえええええええええええ！！！」

俺は駆け出した。

*

「んで改めて聞くぞ。何かあつか？」

「……………」ピクッ、ピクッ。

「返事がない、ただの屍のよ——」ガンッ！

突然頭に衝撃が走った！

「——つううううううう！

おい朱乃！何で殴るンだよ！！」

俺はあまりの痛さに頭を抱えてしゃがみ込む。そして朱乃を見て文句を言った。

ああ、マジでいてえ！

「やり過ぎです！どうせ殺しますけどやり方が凄惨すぎます！兵藤君が怯えてるじゃないですか！そんなのだから《虐殺の紅》ジェノサイド・クリムゾンとか呼ばれるんです！」

え、そうか？別にたこ殴りにしたただけだろ？

イッセーだつてそんなに——

「ガタガタガタガタガタガタガタ」

……めっちゃ震えてるわ。

「あらあら、兵藤君可哀想に……。」

朱乃が怯えるイッセーを抱きしめた。

おーおー、イッセーの奴びびってた癖にもうだらしねえ顔しやがった！

つーか朱乃の乳が潰れてスゲーことになってんな。

「いいな、いいな！俺も朱乃の乳触りてえなあ！なあ朱——」

ギンッ！

ひいつ！！朱乃に睨まれた！！

「部長はアレのトドメをお願いしますね。」ニコニコ

「……はい、アレを消します。」

こええー！マジこええー！

こういう時は言うことに限るぜ。

つーかあれ？俺が主だよな？何かおかしくね？

「リアス…………、早くしてね」ニコニコ

「ひい！ひゃ、ひゃーいつ！！」

気にしない事にしよう！

その後俺は消滅の魔力でバイザーを消し去ったのだった。

余談だが復活したイッセーが俺に質問してきた。

「俺の駒……………っていうか、下僕としての役割って何ですか？」

ああ、まだイッセーには言って無かったな。

「《兵士》だぜ！てめえは《兵士》だ！」

駒8つのとびっきりのな！！

何処か落ち込むイッセーを引き連れこの日は帰宅したのだった。

俺の拳はいてえぞ？（後書き）

リアスさんの異名を変更させてもらいました。
この異名に変わった話はまた別の機会にでも！

大暴れの予感だぜ！（前書き）

更新です！短いよ

大暴れの予感だぜ！

「やべえな」

現在悪魔稼業中なんだがちょいやばいことが起きた。

「如何なさしました？」

朱乃が俺に聞いてくる。

「イツセーの所にはぐれ悪魔被いが出やがった！今のあいつじゃ殺されちまう！」

ち！何でこんなタイミングでくるかねえ！

「部長！ではっ！」

「おう！祐斗と小猫を呼び出せ！今日は終業だ！

転移門は俺が準備すつから朱乃は他のことを任す！一応他の所に、特に教会には念入りに連絡を入れる！間違っちゃいねえだろうが万が一があつたら面倒だ！」

「かしこまりましたわっ！！」

朱乃が慌てたような、だが優雅に動き出す。

俺もちゃっちゃと準備をすますとするか。

イツセー死ぬんじゃないぞ！

*

準備が終わり、転移が完了すると神父が目の前にいやがった。

祐斗達がイツセーに声をかけたり神父が襲いかかって来たりしたが
それどころじゃねえな。この部屋の惨状をみると大分暴れてくれた
みてえだ。俺のシマで良くもまあこれだけの事をしやる。

つーかうだうだうるせえ神父だ……

「消し飛ばすぞこらぁ………」

自分でも驚くほど低い声がでた。

俺はイツセーの横に移動し

「イツセー、わりいな。はぐれ悪魔被いがでるとは思って無かった
んでな。」

そうしてイツセーを見た。

こいつ……

「イッセー、怪我してんのか？」

「あ、すみません。撃たれちゃって」

ブチン！

あの神父、何してくれてんだ？ よりにもよってよお

俺は立ち上がり神父を睨めつけた。

「俺のかわいい下僕を可愛がってくれたみたいだなあ！」

俺の所有物に手えだすとわなあっ！！

「はいはい。可愛がってあげましたよお。本当は全身くまなくザクザク切り刻む予定で――」

「うらあっ！！！！」「ドゴンっ！

」がひっ！！！！？？」

神父が言い終える前に殴り飛ばしてやった。

神父はそのまま壁に衝突して地面に落ちるが気にしてられるか！

「てめえよお、誰の下僕傷つけてんねかわかってんのか？あゝあゝ！？」

俺はよお、俺のもんに傷つけられんのが死ぬほど嫌いなんだよ！特にてめえみたいなカスにされるとハラワタ煮え繰り返りそうないム力つくんだわ。だからよお」

俺の怒気で空気が震え、空間に俺の魔力が満ちる。そして

「消えろや！！」

俺が魔力弾を形成し放とうとしたところで

「！部長、この家に墮天使らしき者達が複数近づいていますわ。このままでは、こちらが不利になります！」

ち！良いところで邪魔がはいりやがる！でもなあ

「上等だこらあ！全部ブチ殺してやらあ！」

何匹いようと関係ねえんだよ！！

俺はさらに魔力弾を形成し迎撃準備にはいるが

ズドン！！

「ぶべっ！

つつつ~~~~！！！！」

またもや頭に特大の衝撃がきた！！

あまりの衝撃に俺は突っ伏し頭を抱えてその衝撃を生み出した主をみた！

「おい、小猫。流石におめえのはやべえだろ。」

小猫は申し訳なせうに俺を見てやがるが

「……すみません、でも緊急事態です。」

そう言つて俺を引きずりやがる！

「あ！おい小猫！痛っ！引きずんじゃねえよ！あっつ！あーもうっ！
イツセー！祐斗！退却だ！」

仕方ねえだろ！俺はまだやりたりねえけど朱乃のニコニコが恐いんだよ！

「部長！ならアーシアも！」

アーシア？ああ、そのシスターね。

「無理だ！この魔方陣は俺らしか転移出来ねえ！今は諦めろ！」

「そんな！アーシア！」

「イツセーさん！また会いましょう！」

その会話を最後に俺達は転移したのだった。

あのクソ神父に堕天使ども。

覚えてろ、俺にちよっかい出したこと後悔させてやるからよお！！

大暴れの予感だぜ！（後書き）

そろそろ一巻もラストに近づいて来ました！リアスさんはどんなことをしてくるのか！

では次回で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2222v/>

ハイスクールD×D ふりょうなりアスさん

2011年10月9日03時58分発行